

「烈士の碑」を中心に祀り、同時に、吉弘統幸の「あすは誰が草の屍や…」の辞世の句と、甘泉作の「石垣原懐古」の詩を大きな石に自筆の字で彫りそれを配置し、供養塔も置き、小さいながら整備して形を整えました。個人の屋敷の内、道路沿いの僅か四十坪のものです。甘泉は書道にも堪能でした。郷土の先人今村珠江先生は、漢詩に吉弘統幸を称え「千秋永く駐む義人の名」と詩われております。明治の詩人綿引東海は別府の地を訪れ、土中に埋もれた矛や

折れた武器などは未だ銷え去っていない、雨の夜などさむらいの哭く声が蕭々として聞こえると詩に読んでいます。この莊園の地は、石垣原合戦の激戦の真った中の土地であり、吉弘統幸の奮戦は言わずもがな、黒田、大友両軍、敵味方に関係なく、多くの武士たちの血が流されたことに哀れをおぼえ、禅僧甘泉は、ここにその霊をお肥りすべきであると、小公園設立を思い立ったに違いありません。

物言わぬ仏像群 堀田「五百羅漢」

非会員 堀田 井 上 友 介

別府市堀田の旧堀田西温泉前にひっそりと祀られている五百羅漢があります。いつ、だれが、なんのために作ったかわからず、今もなぞにつつまれています。笑った顔、瞑想にふけた顔、おどけた顔、さまざま表情の羅漢さんたち、一つ一つ見て歩くと友人知人にそっくりの顔に必ず出会うことができます。

この五百羅漢については文献も無くおそらく江戸時代ぐら



荒廃著しい五百羅漢像

いに村の飢饉・疫病払いや、豊作と健康を祈願して作られたものではないかと思われます。作られた当時どれくらいの数の仏像があったのかも定かではありません。しかし今現在、約一二〇体の仏像が確認されています。明治時代に洞窟の前壁が長年の風雨にさらされていた為に崩壊して多数の仏像が前の池に埋没しました。またその岩盤の崩壊は付近の数軒の宿屋の中まで泥を押し上げる被害を与えたといえます。その後、土の中に埋まった仏像を掘り起こして元の位置に戻したりはしましたが今現在残されている仏像も保存状態が良くなり、早急な保存対策が必要だと考えられています。

わが家に通った ある特攻隊員の思い出

非会員（鶴高四回生・甲子園大会出場）

佐藤 雅彦

昭和十九年（一九四四）の夏と云えば、サイパン玉砕後の戦局急を告げる時期であった。当時、私は別府市立北国民学

校（現トキワ百貨店の場所）の五年生であったが、丁度夏休みの最中であつたと記憶している。

流川通り四丁目の日用商会の武田さんと両親が昵懇であつた関係で、武田さんからの紹介があり、海軍将校二人が週末の休暇を利用して、別府に入湯旁々骨休めに来たいので部屋を提供できないかとの話であつた。

わが家は流川通り二丁目（港町二組）にあり、両親と姉二人（長女は昭和一八年に陸軍中尉と結婚）そして私の五人家族、一階に三部屋、二階四部屋、地階に内湯がある間取りで余裕もあつたこと、一つは父の四人の兄たちが陸軍軍人であつたことなど、母の世話好きな性格もあつて結局引き受けることになったのである。

二人の最初の印象は、若々しく、凛々しい海軍の真つ白な夏服姿が良く似合う将校（少尉）さんであつた。二人とも東京都出身の慶応義塾大学工学部の学生で、二年生の時（昭和一八年秋と思う）学徒動員となり、翌年柳ヶ浦航空隊（宇佐）に配属され、連日、飛行訓練に従事しているとのことであつた。一人は貴島さん、厳父が製紙会社の役員、第二人も慶応の学生という家庭、一人は高橋さん、東京銀座の洋服屋の一人息子、二人して実に育ちの良いスマートな好青年であつた。